

範疇の形而上学的演繹

林 昌 道

The Metaphysical Deduction of the Categories

Masamichi Hayashi

はじめに

この小論は Kant の範疇の形而上学的演繹を、その先験的演繹との関係において捉えることを目的とする。Kant は『純粋理性批判』において、範疇の形而上学的演繹を遂行した後でその先験的演繹にとりかかったと普通に解されているが、この解釈に検討の余地はないのであろうか。私はこの問題に答えようと努めた。

1

Kant は『純粋理性批判』において我々の認識を考察の対象としている。「我々の認識は心性の二つの源泉から生ずる。第一の源泉は表象を受け取る能力（印象の受容性）であり、第二の源泉は之らの表象によって対象を認識する能力（概念の自発性）である。第一の源泉により我々に対象が与えられ、第二の源泉により対象が先の表象（心性の単なる規定としての）との関係において思惟される」（A50=B74）。Kant によれば、「我々の心性が何らかの仕方で触発される限り表象を受け取る我々の心性の受容性」は感性であり、「表象そのものを産出する能力或いは認識の自発性」は悟性である（A51=B75）。

悟性の使用に関わる論理学は一般的悟性使用の論理学並びに特殊的悟性使用の論理学として企てられ得るとされている（A52=B76）。前者は「悟性の如何なる使用もそれなしには生起せぬという思惟の端的に必然的な規則を含み、したがって悟性使用が向けられる対象の差異を顧慮しないで悟性使用に向かう」（A52=B76）。後者は「或る種の対象に関して正しく思惟する規則を含む」（A52=B76）。後者はいずれかの学の機関である。一般論理学は純粋論理学と応用論理学に分かれる（A52=B77）。一般純粋論理学においては「我々は我々の悟性がその下で用いられるあらゆる経験的制約を捨象する。例えば感覚の影響、構想の戯れ、記憶

の法則、習慣の力、傾向性等、したがってまた偏見の源泉、否、総じて、我々に或る認識が生ずる原因或いは或る認識が誤ってそれに帰せられる原因さえも捨象する。というのは之らのものは悟性にその適用の或る事情の下において関するだけであり、之らの事情を知るためには経験が必要とされるからである。したがって一般純粋論理学は先天的原理にのみ関わり、悟性と理性との規準である。その場合悟性と理性の使用の形式に関するのみであり、内容が何であろうと（経験的であろうと先験的であろうと）それは問うところではない」（A52-3=B77）。之に対して一般応用論理学は、「心理学の示す主観的経験的制約の下における悟性使用の規則に関わる」（A53=B77）。一般純粋論理学は「悟性認識のあらゆる内容と悟性認識の対象の差異とを捨象する、そして思惟の単なる形式のみを扱う」（A54=B78）。

Kant によれば、一般論理学は認識のあらゆる内容、言い換えれば認識の客観に対するあらゆる関係を捨象し、単に認識相互の関係に於ける論理的形式、即ち思惟一般の形式を考察する（A55=B79）。之は一般純粋論理学について述べたことばと思われるが、Kant はこの意味における一般論理学に対して、対象の純粹思惟の規則のみを含む論理学を構想する（A55=B80）。後者の論理学は対象認識の根源を、それが対象に帰せられ得ぬ限り目指す（A55=B80）。Kant はこの論理学を先験的論理学とよぶ。次のことばが参照されねばならない。「純粹な或いは感性的な直観としてではなく、単に純粹思惟の働きとして、したがってその起源が経験的でもなく美的感覚にもないところの概念たる純粹思惟の働きとして先天的に対象に連関する概念が恐らく存し得るであろうという期待の下に、我々は、対象をそれにより完全に先天的に思惟する純粹悟性認識と純粹理性認識の学の理念をあらかじめ作るのである。そのような認識の根源、範囲及び客観的妥当性を規定

する斯かる学は先験的論理学と称さねばならぬであろう。というのはこの学は悟性と理性の法則を扱うが、それらの法則が先天的に対象に関係せしめられる限りにおいてのみである……からである」(A57=B81-2)。

ところで「純粹思惟の働きとして先天的に対象に連関する概念」は果して存するのであろうか。確かに対象認識の成立のためには対象の表象がお互いと規則に従って結合されなければならないであろうが、この表象間の結合が「純粹思惟の働きとして先天的に対象に連関する概念」と如何なる関係にあるかは探究を要しよう。Kantは上述の概念が存すると考え、之を純粹悟性概念とよぶ。Kantは「判断における統一の機能を完全に示すことができるなら、悟性の機能はひっくりめて見出され得る」と述べ(A69=B94)、判断の表から純粹悟性概念の表を導こうとする。

2

(1) 私は判断と純粹悟性概念との関係に関するKantの考察に触れることにしたい。Kantは『純粹理性批判』第1版の「概念の分析論」の第1章「凡ての純粹悟性概念を発見する手引について」第1節「論理的悟性使用一般について」において「判断は対象の間接的認識であり、したがって対象の表象の表象である」(A68=B93)、或いは「判断は我々の表象間の統一の機能である」(A69=B94)と述べている。之に付したKantの説明は次の如くである。「あらゆる判断のうちには多に対して妥当する概念が含まれ、この多の下にはまた、対象に直接連関するところの与えられた表象が含まれている。例えば〈あらゆる物体は可分的である〉という判断において、可分的なものの概念は他の様々な表象に連関し、その様々な表象のうちここでは特に物体の概念に連関し、物体の概念は我々に現われる何らかの現象に連関する。斯くして之らの対象は可分性の概念により間接的に表象される。したがってあらゆる判断は我々の表象間の統一の機能である。というのは詳しくいうと、直接的表象の代りにこの表象と幾つかの表象とを自らの下に包括する高次の表象が対象の認識に用いられ、多くの可能的認識がそのことにより一つの認識において関連せしめられるからである」(A68-9=B93-4)。⁽¹⁾ Kantは悟性の凡ての働きを判断に還元できるとし、「悟性一般は判断する能力として表象され得る」という(A69=B94)。Kantは悟性と判断について上のような見解を明らかにした後で「したがって判断における統一の機能を完全に示すこ

とができるなら、悟性の機能はひっくりめて見出され得る」と述べて、第1節「論理的悟性使用一般について」を結んでいるのである(A69=B94)。このことばは深い意味をもつと思われる。私はこのことばの意味を捉えるために更にKantの叙述をみて行かねばならぬと思う。

上記の節に続く第2節「判断における悟性の論理的機能について」(この節は『批判』の第2版においては第9項とされている)において判断表が提示されている。第3節は「純粹悟性概念即ち範疇について」なる項(これは『批判』の第2版においては第10項とされている)と第2版において加えられた二つの項(これは第11項と第12項である)から成る。第3節の「純粹悟性概念即ち範疇について」なる項(A76-83=B102-9)においては判断よりも総合が考察の中心に置かれている。Kantはこの項において純粹直観の先天的多様の総合の場合と、「多様(それが経験的に与えられていようと先天的に与えられていようと)の総合」の場合を区別している。前者の場合についてKantはいう。「純粹悟性概念に質料を与えんがために先験的感性論が先験的論理学に対して差し出す感性の先天的多様を先験的論理学は自らの前に有する。この質料なくしては純粹悟性概念は凡ての内容を欠き、したがって全く空虚であるだろう。さて空間・時間は純粹直観の先天的多様を含む。しかし空間・時間は我々の心性がその下においてのみ対象の表象を受け取り得るという我々の心性の受容性の制約に属する。……だが我々の思惟の自発性は、この多様が認識を作るために先ず或る仕方を通覧され、受容されそして結合されることを要求する。この働きを私は総合と名づける」(A76-7=B102, v. Leclairに従ってwürdeをwürdenと訂正)。ここで注意すべきは、感性の先天的多様なくしては純粹悟性概念が凡ての内容を欠くといわれていることである。ここでは純粹悟性概念が感性の先天的多様に連関せしめられるのは当然のこととして扱われていると思われる。この項(A76-83=B102-9, 第2版第10項)には、純粹悟性概念と感性の先天的多様との関係を告げている次のような文がある。「一般的に表象された純粹総合は純粹悟性概念を与える。ところで私は斯かる総合の下に先天的総合的統一の根拠に基づくところの総合を理解する。斯くして我々の数える働き(Zählen)は(特により大きな数の場合にはより一層気づき易いが)概念に従った総合である。というのはそれは統一の共通の根拠(例えば十進法)に従って行なわれるから。斯くしてこの概念の下において多様の

総合における統一は必然的となる」(A78=B104)。この数える働きは感性の先天的多様の総合であり、そして先天的総合的統一の根拠に基づく総合である。この統一の根拠は概念であると解される。感性の先天的多様と純粹悟性概念の関係の捉え方は、上に引用したA76-7=B102の文と同じであると解される。⁽²⁾

さてA76-83=B102-9(第2版第10項)には「多様(それが経験的に与えられていようと先天的に与えられていようと)の総合」のことが言及されている。これは次の文脈の中に述べられている。「私は最も一般的な意義における総合の下に次の働き、即ち様々な表象を次々に付け加え、それらの多様性を認識のうちに包括する働きを解する。……多様(それが経験的に与えられていようと先天的に与えられていようと)の総合が初めて認識をもたらす。この認識はなる程初めはなお粗雑で混乱していることがあり得るが、したがって分析を必要とするが、総合のみがもともと認識の要素を集め或る内容へと結合するものである。我々が我々の認識の第一の源泉について判断しようとする場合我々が注目しなければならぬ第一のものは総合である」(A77-8=B103)。ここで「多様(それが経験的に与えられていようと先天的に与えられていようと)」といわれているものは感性的直観の経験的多様と先天的多様を一括したものを指すのであろう。之を感性的直観の多様一般とよぶことにする。感性的直観の多様一般の総合と純粹悟性概念との関係については触れられていない。感性的直観の多様一般の場合には、感性的直観の先天的多様の場合とは違って、純粹悟性概念との関係に関して問題が存することをKantは認めていたのではなからうか。次のことは感性的直観の多様一般の総合に関して述べたものであると解される。「この総合を概念にもたらすのは、悟性に属する機能であり、この機能により悟性は初めて我々に本来の意義における認識を与えるのである」(A78=B103)。

Kantは感性的直観の先天的多様の総合に並行するものとして感性的直観の多様一般の総合を捉えている。そして先天的多様の総合の場合に可能であった純粹悟性概念との関係を感性的直観の多様一般の総合の場合におし及ぼそうとする。それは次のことばに明らかである。「判断において様々な表象に統一を与えるその同じ機能が直観における様々な表象の単なる総合に統一を与えもする。この機能は一般的には純粹悟性概念と称する。斯くして同一の悟性が、而もそれにより悟性が概念において分析的統一を通じて判断の論理的形式を実現したまさに同一の働きにより、直観一般に

における多様の総合的統一を通じて悟性の表象のうちに先験的内容をもたらしもする。その故に悟性の働きは先天的に客観に向かう純粹悟性概念と称する」(A79=B104-5)。上に引用したこの文は第10項のそれまでの箇所において基礎づけられているであろうか。私には基礎づけがないように思われる。上に引用したA79=B104-5の文は主張されているのである。⁽³⁾Kantは感性的直観の先天的多様の総合に対する純粹悟性概念の関わりを第10項において説明し、或る基礎づけをしていると解されるが、感性的直観の多様一般の総合に対する純粹悟性概念の関わりについては、感性的直観の先天的多様の総合の場合におけるような基礎づけを与えていない。そこで感性的直観の多様一般の総合に対して純粹悟性概念の有する関わりについて説明しその基礎づけを与えることが必要となったのである。だが第10項においてはその基礎づけに際して判断の果す役割が十分明らかになっているとはいえない。確かに上に引用した文(A79=B104-5)に続けてKantは次のように述べている。「そのようにして、前掲の表にあらゆる可能な判断における論理的機能があったのとまさに同数の、直観一般の対象に先天的に向かう純粹悟性概念が生ずる」(A79=B105)。しかし「直観一般の対象に先天的に向かう」権利は純粹悟性概念に存するであろうか。私はここでも純粹悟性概念が「直観一般の対象に先天的に向かう」ということは単に主張されているのみだと解する。また判断における論理的機能の数だけの純粹悟性概念が存するということは十分説明されてはいないと考える。このように解することが許されたとしたら、純粹悟性概念が「直観一般の対象に先天的に向かう」権利の証明が先ず要求されることになろう。そうして次に「あらゆる可能な判断における論理的機能があったのとまさに同数の純粹悟性概念」が存することを示すことが要求されることになろう。

(2) 私はここで『プロレゴメナ』をみることにしたい。Kantは『プロレゴメナ』の「主要問題第2編〈如何にして純粹自然科学は可能であるか〉」において次のように述べている。「悟性の関わることは思惟することである。思惟することは表象の一つの意識において結合することである。この結合は単に主観に対して生じ、偶然的で主観的であるか、或いは端的に生じ、必然的或いは客観的であるかである。一つの意識における表象の結合は判断である。斯くして思惟することは判断すること或いは表象を判断一般に連関せしめることである。したがって判断は表象が主観における一つの意識にのみ連関し、その意識において結合される場合

主観的である。或いは判断は表象が意識一般において、即ちそれにおいて必然的に結合される場合、客観的である」(第22項)。ここでは判断は主観的であるか客観的であるかである。その二つの場合は表象が意識一般において結合されているか否かにより区別されている。判断の客観性の基礎に存するのは意識一般における表象の結合であり、客観との関係は意識一般における表象の結合から明らかにさるべきものと考えられている。

判断と純粹悟性概念の関係に関しては次のようにいわれている。「経験は一つの意識における現象(知覚)の総合的結合——これが必然的である限り——において存立する。したがって知覚の総合的統一がそれにおいて必然的、普遍妥当的として表象されるところの経験判断に知覚が役立ち得るに先立ち、あらゆる知覚はまず純粹悟性概念の下に包摂されなければならないのである」(第22項)。Kantのこの考察の根底には知覚判断と経験判断の区別が存すると解される。Kantは『プロレゴメナ』の「主要問題第2編」においては、経験判断の普遍妥当性から分析的方法により純粹悟性概念の客観性に到達している。Kantは純粹悟性概念の客観性に到達してから「判断作用における悟性の種々の契機」(第21項)を示している。Kantのことはを挙げることにする。「経験の可能性が先天的純粹悟性概念に基づいている限り、経験の可能性を説明せんとすれば、我々は判断作用一般に属するもの及び判断作用における悟性の種々の契機を先ず完全な表で示さねばならぬ。というのは純粹悟性概念は、直観一般が判断作用の之らの契機のいずれかに関してそれ自身において、したがって必然的、普遍妥当的に規定されている限りにおいて、その直観一般の概念に他ならないのであり、判断作用の之らの契機に完全に厳密に並行するであろうから。このことにより、客観的に妥当する経験的認識としてのあらゆる経験の可能性の先天的原則もまた完全に厳密に規定されるであろう。というのは之らの原則はあらゆる知覚を(直観の何らかの普遍的制約に従って)かの純粹悟性概念の下に包摂する命題に他ならぬから」(第21項)。Kantが経験の可能性を思惟のテーマとして取り上げたとき、経験の可能性を純粹悟性概念に基づくものと考えている。その意味においてKantは純粹悟性概念の客観性を前提していたのである。純粹悟性概念の客観性を証明されるべきこととは看做していないのである。Kantは分析的方法により経験の可能性のうちに前提されていた純粹悟性概念の客観性に到達した。Kantは純粹悟性概念に如何なる

ものがあるかを確定しようとして、次に「判断作用における悟性の種々の契機」を探究したのである。「判断作用における悟性の種々の契機」から純粹悟性概念の表に到達していると解される。『プロレゴメナ』第39項に上のように解される箇所がある。Kantのことはを引用することにする。「そのような原理[これに従って悟性が完全に測定され、そして悟性の純粹概念の生ずる源たる悟性のあらゆる機能が余すところなく精確に規定され得る]を見出すために、私は悟性の働きを探した。その働きというのは他のあらゆる悟性の働きを含むもので、ただ表象の多様を思惟一般の統一の下へもたらす様々の変様や契機によってのみ区別されるものである。そうして私はこの悟性の働きが判断作用を本質とすることを見出した。さて此処、私の前には、なお欠陥を完全に免れたとはいえぬにせよ、既に完成された論理学者の仕事があった。それにより私は、あらゆる客観に関して無規定である純粹悟性機能の完全な表を提示することができるようになった。私は最後に、この判断する機能を客観一般に、というよりは寧ろ判断を客観的妥当的として規定する制約に連関せしめた。すると純粹悟性概念が生じたのである」(第39項)。

私は『プロレゴメナ』第21項の、先に引用した叙述に関して次の問題が提起され得ると考える。即ちKantは経験判断の普遍妥当性から分析的方法によって純粹悟性概念の客観性に到達したが、Kantは経験判断の普遍妥当性に如何にして至ったのかという問題である。この点に関してP. F. Strawsonの見解は示唆に富む。「もし経験がこの重要な意味における対象の認識を必然的に含むということが〈経験〉ということばの定義に関わる事柄であるとされるならば、分析の企ての或る関心は消え失せる。最初、探究はあたかもそれが定義に関わる事柄であるかの如く、即ち経験がこの意味における対象の認識を含むというテーゼは分析的議論の基本的前提として扱わなければならないかの如く進行するように見えるかもしれない。しかし幸いなことに、議論が進展するにつれて、事態はそうではなく、このテーゼは前提としてのその地位を、このテーゼそれ自身がそこから導出されるより基本的な原理——今、我々はこの原理を単に意識の必然的統一の原理と呼んでおこう——に譲り渡すということが明らかになるのである⁽⁴⁾。」Strawsonは、経験判断の普遍妥当性がそこから導出される、より基本的な原理として意識の必然的統一の原理を見出していたと解される。Strawsonのいう「意識の必然的統一の原理」とは如何

なる原理であらうか。Strawsonの次のことは「意識の必然的統一の原理」について語ったものであろう。

「〈先験的演繹〉の基本的前提は、経験は様々な要素(直観)を含んでおり、この様々な要素は、経験のあらゆる主題の場合に、判断をなし得るところの、即ちそのように統一されたそれら要素を概念化し得るところの一つの意識のうちに何らかの仕方で統一されなければならない、ということである。⁽⁵⁾」私は『プロレゴメナ』においては、経験判断の普遍妥当性がそのことから導出されるより基本的な原理としての「意識の必然的統一の原理」について触れられていないと思う。

『プロレゴメナ』における、経験判断の普遍妥当性から純粹悟性概念の客観性への到達に関して上述の如きことが指摘され得るが、純粹悟性概念の客観性への到達の後に、「判断作用における悟性の種々の契機」が提示されているということに注意を促しておきたい。

(3)『自然科学の形而上学的原理』の序文の註には知覚判断と経験判断の区別は言及されていない。そこでは判断一般について「それにより所与表象が初めて客体の認識となるところの働き」といわれており(IV, 475⁽⁶⁾), 単に主観に対して生じる主観的偶然的結合は判断のうちに含まれていないと解される。この序文の註には「判断一般における論理的機能から借りて来られた我々の意識の規定としての範疇の表」という語句が見出される(IV, 474)。『自然科学の形而上学的原理』の序文の註において範疇の演繹についてどのように述べられているであらうか。批判の体系の主目的は「純粹理性の限界規定」であるが、この体系の主要基礎は範疇の演繹である。「範疇の完全に明瞭で十分な演繹」のためには範疇が如何にして経験を可能ならしめるかの問いに答えることは重要である。しかし範疇が如何にして経験を可能ならしめるかの問いに答えることは体系の主目的にとっては単に役立つだけでどうしても必要というものではない。体系の主目的のためには、「範疇は直観(我々にあっては常に感性的であるにすぎぬ)に適用される限りにおける判断の形式に他ならないが、直観への適用によって始めて客体を得、認識となる」ということを演繹が示すならば、それで十分である。Kantは「範疇の完全に明瞭で十分な演繹なくしては純粹理性批判の体系の基礎は動揺する」という批評に対して次のように述べている。「私は主張する。あらゆる我々の直観が感性的であることと、判断一般における論理的機能から借りて来られた、我々の意識の規定としての範疇の表の十分なることとについての私の命題に同意する(評者がなすように)人に対して

は批判の体系は必証的確信を伴わねばならぬ、と。というのは批判の体系は、我々の理性の凡々の思弁の使用が決して可能的経験の対象以上には及ばないという命題の上にたてられているからである」(IV, 474)。ここには判断一般における論理的機能からの範疇の導出を承認する人は批判の体系を承認しなければならない、というKantの考えが述べられている。Kantは、批判の体系はその主要基礎たる範疇の先験的演繹によって確立されているが、範疇表の完全性に対して疑念を懐く人がいるのかもしれない、と考えたのだらう。Kantは判断表から範疇を導出することにより範疇表の完全性を確信していた。そこでKantは範疇表の完全性を承認する人は批判の体系を承認しなければならない、と述べたのである。批判の主要基礎についてのKantの、次にかかげる見解は上述のような解釈からすれば理解が容易であるように思う。

Kantによれば、完全な演繹がなされなくても批判の主要基礎は確立されているのである。そしてこのことは次の三つの真として承認された事項から証明されとする。三つの真として承認された事項とは次の如くである。

1. 「範疇表はあらゆる純粹悟性概念を完全に含み、そしてまさにそのようにして判断におけるあらゆる形式的悟性活動を含む。範疇は判断における形式的悟性活動から導出され、そして判断における形式的悟性活動から、客体が悟性概念によって判断の一または他の機能に関して規定されていると思惟されるということにおいてのみ範疇は区別されている。

2. 「悟性はその本性により先天的総合的原則を伴うが、この先天的総合的原則により悟性は自らに与えられるあらゆる対象を件の範疇に服せしめる。したがって件の純粹悟性概念の適用に必要な制約を含む先天的直観も存在しなければならぬ。というのは直観なくしては、論理的機能がそれに関して範疇として規定され得る客体が存しないことになる……から。」

3. 「この純粹直観は外官または内官の現象の、したがってまたただ可能的経験の対象の単なる形式(空間・時間)以外のものではあり得ない。」

Kantは以上の三つの承認事項から次の帰結を引き出す。即ち「純粹理性のあらゆる使用は経験の対象以外のものに向かうことはできないということ、そして先天的原則においては経験的なものは制約たり得ないから、先天的原則は経験一般の可能性の原理以上のものではあり得ないということ」である。このことのみが、Kantによれば、「純粹理性の限界規定の真にして

十分なる基礎」である(IV, 475)。

承認事項2において先天的総合的原則のことが言及されているが、Kantはこの原則を経験の可能性の制約と看做していたと思われる。悟性は自らに与えられる対象をこの原則により範疇に服せしめるとされているのであるから、承認事項2において範疇の客観性への到達が告げられている。承認事項1は判断表からの範疇の導出について触れている。Kantは承認事項2及び1において、『プロレゴメナ』の立場——即ち一方において経験の可能性から範疇の客観性に到達し、他方において判断表から範疇を導出しているというものを踏襲していると思われる。承認事項2及び3は完全な演繹に属するものではないと私は考える⁽⁷⁾。『自然科学の形而上学的原理』序文の註におけるKantの考えは、批判の体系の主要基礎としての範疇の演繹についての発言並びに承認事項にみられるKantの見解によれば、『プロレゴメナ』における考えと一致していることができる。

(4)『純粹理性批判』第2版の「概念の分析論」の第2章「純粹悟性概念の演繹について」の第2節「純粹悟性概念の先験的演繹」において、判断は「与えられた認識を統覚の客観的統一にもたらす仕方である」とされている(B141, 第19項)。この第19項において「客観的に妥当的な関係」としての判断は「単に主観的妥当性が存するだけの、例えば連想の法則に従った」表象の関係から区別されている。第19項における、判断と「単に主観的妥当性が存するだけの」表象の関係との区別は、『プロレゴメナ』第18項における経験判断と知覚判断の区別を想起させるものであるが、Kantは経験判断と知覚判断ということばを『純粹理性批判』の第19項では用いていない。Kantは第19項において経験判断と知覚判断の区別という考え方に余り重きを置かなくなっているのではなからうか、と考えられる。Kantは第20項において「範疇は与えられた直観の多様がそれに関して規定されている限りにおいての判断のまさにこの機能に他ならない」と述べている(B143)。「判断のこの機能」が「与えられた直観の多様」に関係づけられることに関しては第20項の、この文より前の部分において説明されている。私は第20項について考察することにしたい。第20項は次の五つの命題から成る。「感性的直観において与えられた多様なものは統覚の根源的総合的統一の下に必然的に属する、というのは統覚の根源的総合的統一によってのみ直観の統一は可能であるから(第17項)。ところで与えられた表象(それが直観であろうか或いは概念であらう

うと)の多様がそれにより統覚一般の下にもたらされるところの悟性の働きは悟性の論理的機能である(第19項)。それ故あらゆる多様は、それが一つの経験的直観において与えられている限り、多様がそれにより意識一般にもたらされるところの判断の論理的機能の一つに関して規定されている。さて範疇は与えられた直観の多様がそれに関して規定されている限りにおいての判断のまさにこの機能に他ならない(第10項)。

〔Vaihingerの訂正に従い、第13項を第10項とする。〕それ故与えられた直観における多様もまた必然的に範疇の下に立つ。この五つの命題を順に命題I, II, III, IV, 及びVとすることにしたい。命題Iにおいて、「感性的直観において与えられた多様なものは統覚の根源的総合的統一の下に必然的に属する」といわれている。この原理は第16項に「統覚の必然的統一のこの原則」(B135)として登場していると解される。「統覚の必然的統一」の原則は、『批判』第1版の「概念の分析論」の第1章「凡ての純粹悟性概念を発見する手引について」(A66-83)には触れられていないと私は解する。第20項の命題IIは、統覚の統一と判断の論理的機能との関係について明らかにした命題であるが、この命題の内容はやはり『批判』第1版の「概念の分析論」の第1章には触れられていない。第20項の命題IIIは命題Iと命題IIとからの帰結であるが、命題I, II及びIIIが範疇の先験的演繹の主要部分をなすと私は解する。命題IVは範疇の定義を与えている⁽⁸⁾。範疇の斯かる定義は命題I, II及びIIIに依拠していると考えられる。範疇について斯かる定義がなされた場合、範疇を判断表から導出するということも基礎づけられていると考えられる。判断表からの範疇の導出は範疇の形而上学的演繹とよばれている(B159)。範疇の形而上学的演繹は範疇の先験的演繹により得られた範疇の定義を基礎としている。この意味において範疇の形而上学的演繹は範疇の先験的演繹を前提とする、といえよう。

私は『批判』第1版の「概念の分析論」の第1章「凡ての純粹悟性概念を発見する手引について」の第3節「純粹悟性概念即ち範疇について」を取り上げたとき、純粹悟性概念が「直観一般の対象に先天的に向かう」権利の証明が先ず必要であること、そして次に「あらゆる可能な判断における論理的機能があったのとまさに同数の純粹悟性概念」が存することの明示が必要であることを指摘した。二つの必要なことのうち第一のことは範疇の先験的演繹により実現され、第二のものは範疇の形而上学的演繹により実現されていると私は考える。範疇の先験的演繹と範疇の形而上学的演繹と

の関わり合いは、私のみるところによれば、『批判』の第2版において初めて明瞭なものとなったのである。

範疇の形而上学的演繹と先験的演繹についての Strawson の把握の仕方を取り上げることにする。Strawson の解釈の一つの特質は次のことばのうちに示されている。「判断形式からの範疇の形而上学的演繹と特殊な範疇のこうした解釈及び証明〔原則の分析論においてなされた解釈及び証明〕との間には先験的演繹の全ミステリーが横たわっているのである。⁽⁹⁾」彼は範疇の形而上学的演繹の後に先験的演繹が遂行されていると解している。彼の斯かる解釈は彼の範疇の捉え方と連関している。彼は範疇について次のような捉え方をしている。「この重要な意味における対象の認識を含むと解される経験については、厳密に解釈した感性論の理説が正しい場合我々が恐らくもたなければならぬであろうような単に時間的または単に空間的概念と、更に加えて或る確定可能な一般概念乃至は一般概念タイプとの使用を含意するという考えしか恐らく浮かばないであろう。そしてもしそうであるならば、そのような概念乃至概念タイプを確定し、そしてそれらがこうした状況にあることを示すことが分析論の仕事となるであろう。明らかに Kant はそうした概念が存在すると考えており、その名称も用意している。それらは範疇即ち純粹悟性概念である。⁽¹⁰⁾」この見解は Kant が『プロレゴメナ』第39項で述べた見解と一致すると思われる。Strawson 自身このことを認めている⁽¹¹⁾。私は『プロレゴメナ』第39項は統覚の必然的統一の原則について触れていないので範疇の演繹の説明は十分にはなされていない、と解する。Strawson においては『批判』第2版の「純粹悟性概念の先験的演繹」なる節の第20項における範疇の定義が十分注目されていない。第20項において Kant は範疇の定義に到達するに先立って、統覚の統一に対する判断の論理的機能に注意を向けている。Strawson は統覚の統一のことを顧慮せずに一般概念乃至一般概念タイプを挙げている。このような Strawson の範疇についての捉え方からすれば、次のような批評がなされるのも尤もなことである。「どんな命題や判断も、形式論理学において承認され分類された一般的形式のどれかをもたねばならない。しかしこのことは、形式論理学が我々の探究しているもの、即ち経験の対象に適用されなければならない一般概念を直ちに与えるということを意味していない。⁽¹²⁾」「先験的演繹の一般的結論は、この統一〔意識における様々な要素の統一〕が経験の多様な要素の側における他の種類の統一乃至結合を要求する、即ち

経験が統一された客観的世界の経験という性格をもた人がために、したがって客観的経験的判断において表現され得るがために必要とされるような統一を要求する、ということである。この一般的結論に関する限り、もし経験の概念化が客観性と統一という之らの一般的要求を満たすことである場合、厳密に言ってどんな特殊の概念乃至概念タイプが——そうしたものが存在するとして——必要不可欠であるのかは殆ど決定されていない問題である。しかし Kant は形而上学的演繹に依拠して、論理学の形式から導出された〈純粹概念〉がまさしくそうした概念的要素であると考えてよいとするのである⁽¹³⁾。」

Strawson の上の批評において、Kant は形式論理学に依拠して範疇を挙げたと看做されているが果たしてそうであろうか。私は形式論理学の判断表から Kant が範疇を導出したという解釈には従わない。このことについて次に触れる。

3

Kant は判断表から範疇を導出したが、それについて考察することにした。

表象一般に關しての判断の論理的機能に如何なるものがあるであろうか。Kant は判断の論理的機能の表を示している。Kant によると「判断の形式に關しての判断の区別は量、質、関係及び様相の四つの主要契機に還元される」(『論理学』第20項⁽¹⁴⁾)。

「量に關しては判断は全称的か特称的か単称的かである」(『論理学』第21項, Vgl. A70=B95)。量に關しての判断の分類のうちに単称判断を入れたことについて Kant は次のようにいう。「單に認識として量に關して單称判断の全称判断に対する関係は單一性の無限性に対するその如くである。したがって單称判断と全称判断はそれ自体においては本質的に區別されている。故に私が單称判断を單にその内的妥当性に關してだけでなく、認識一般として、單称判断が他の認識に比べて有する量に關しても査定するならば、單称判断は勿論全称判断から區別されており、思维一般の契機の完全な表において……特別の位置を与えられるに値する」(A71=B96-7)。Kant は單称判断を判断の分類の中に入れる場合、判断の關係に制限された論理学とは異なる立場に立っている。つまり一般論理学とは異なる立場に立っている。Kant は斯かる立場に立って全称的、特称的及び單称的の三つの判断を挙げ、その判断に存する判断の論理的機能を考える。この論理的機能が与えられた直観の多様と關係せしめられる場

合、総体性、数多性及び単一性の三つの範疇が得られる。

Kantによると「質に関しては判断は肯定的か否定的か無限的かである」(『論理学』第22項。Vgl.A70=B95)。「無限判断は単に主語が述語の領域に含まれていないということを示しているのではなく、主語が述語の領域外のどこか無限の領域のうちに在ることを示している。したがってこの判断は述語の領域を制限されたものとして表象する。というのは無限判断によっては有限の領域Aを越えて如何なる概念の下に客体が属するかは何も規定されず、ただ客体がAの外の領域に属するということが規定されるだけだから……。排除は否定であるとはいえ、概念の制限は積極的働きである。したがって限界は制限された対象の積極的概念である」(『論理学』第22項。Vgl.A71-3=B97-8)。Kantによれば、無限判断を肯定判断と区別するのは先験的論理学の立場においては必要なことである(Vgl.A71=B97)。Kantは先験的論理学の立場に立って判断の質に関して判断を肯定的、否定的及び無限的の三つに分け、それぞれの判断のうちに判断の論理的機能を見出した。この論理的機能が与えられた直観の多様に連関せしめられる場合、実在性、否定性及び制限性の三つの範疇が得られる。

Kantは「関係に関しては判断は定言的か仮言的か選言的かである」という(『論理学』第23項。Vgl.A70=B95)。関係に関しての判断の分類は一般論理学で行なわれている分類である。Kantはこの三つの判断の根底に存するものについて、「判断における思惟のあらゆる関係はa)述語の主語に対する関係、b)根拠の帰結に対する関係及びc)区分された認識相互の、そして区分の凡ての肢相互の関係である」(A73=B98)。Kantは選言判断が「二つまたはそれ以上の命題相互の論理的対立の関係を含む(一命題の領域が他の命題の領域を排除する限り)が、それらの命題が相合して本来の認識の領域を満たす限り、同時に相互性の関係を含むものである」という(A73=B99)。Kantは判断の關係に注目して定言的、仮言的及び選言的の三つの判断を挙げ、その判断のうちに判断の論理的機能を見出した。この三つの論理的機能は「述語の主語に対する関係」、「根拠の帰結に対する関係」及び「命題相互の論理的対立の関係……と同時に相互性の関係」の三者である。この三つの論理的機能が与えられた直観の多様に連関せしめられた場合、それは「実体と属性」、「原因と結果」、及び「相互性」の三つの範疇である。

Kantはいう。「判断の様相は、判断の内容に何ら貢

献しない(というのは量・質及び関係以外に判断の内容をなすものは他にないから)思惟一般に関しての繫辭の価値にのみ関わるという特質をそれ自身に有する全く特殊な判断機能である」(A74=B99-100)。「蓋然的判断は、肯定または否定が単に可能的(任意的)として想定される判断である。実然的判断は、肯定または否定が現実的(真)と看做される判断である。必証的判断は、肯定または否定が必然的と看做される判断である」(A74-5=B100)。Kantは様相による判断の区分が量・質或いは関係による判断の区分とは次元を異にすることを認めざるを得ない。更に次のことも指摘し得るであろう。即ち様相による判断の区分が判断内容の肯定乃至否定の可能性、現実性或いは必然性を前提していること、更にその可能性、現実性或いは必然性を陳述する主体が存在していることである。様相判断の根底に如何なる概念が存するであろうか。Kantは蓋然的、実然的及び必証的の三つの判断の根底にそれぞれ可能性、現実性及び必然性の概念を見出していたと思われる。この三つの概念が表象(直観であろうと概念であろうと)に関しての判断の論理的機能であると思われる。この三つの概念は判断内容の肯定または否定に陳述されるものであるから、論理的概念であると思われる⁽¹⁵⁾。この場合論理的現実性と論理的必然性が如何にして区別され得るかが問題となろう⁽¹⁶⁾。

判断表から導出された様相の範疇についてKantは次のように述べている。「様相の範疇は、それらが述語として付加される概念を客体の規定としては少しも増大せしめることなく、ただ認識能力に対する関係を表わすだけである、という特殊な点をそれ自身に有している」(A219=B266)。

私はKantが提示した判断表が形式論理学に大いに依存したものであることは認めるが、Kantが形式論理学に完全に依存して判断表を提示したとは考えない。Kantは『批判』第1版において判断表を提示しているが、この判断表は、判断の本質についてのKantの探究に基づいて提示されたものと考えられる。無限判断について触れた箇所においてKantが「判断における思惟のあらゆる契機⁽¹⁷⁾の先験的表」ということばを用いているのは、上述のことを証明するものと私は考える。Kantは『批判』の第2版において、批判哲学の体系に受容され得る判断の定義をしているが、『批判』の第2版において、第1版における判断表がそのまま踏襲されたのは、第2版刊行の段階においてKantが第1版の判断表を完全なものと看做したということなの

である。

4

私は、範疇の形而上学的演繹について考察した R. P. Horstmann の論文を取り上げることにする。⁽¹⁷⁾ Horstmann は R. P. Wolff, P. F. Strawson 及び J. Bennett の 3 人の解釈を紹介し、彼らにおいて (1) 形而上学的演繹の目的に関して不明瞭な点が存すると思われること、(2) そもそも形而上学的演繹が Kant により企てられたことについてはっきりした意識が存しないように思われることを指摘する。Horstmann は (1) 形而上学的演繹の明瞭に規定され得る目的が存すること、(2) Kant は形而上学的演繹なくしては範疇一般の先験的演繹を擁護し得ないであろうということの二点を示すことにとりかかる。Horstmann によると、「如何に概念が対象に連関するかをひとが明らかにしようとするなら、ひとは何らかの仕方では概念が対象に連関し得るということを前提している」(S. 25)。斯くして形而上学的演繹に次のような役割が与えられると Horstmann はいう。「先天的概念が対象一般に連関するということが一般に可能であるという想定を証明することが形而上学的演繹である」(S. 25)。このような Horstmann の解釈は形而上学的演繹に大きな役割を与えるものである。Horstmann は、先天的概念が対象に連関し得るとひとが主張せんとする場合充たされねばならぬ制約の分析として形而上学的演繹を捉える。

その第一段階は、先天的概念が対象に連関し得るのは如何なる制約の下においてであるかの問いの解決である。

第二段階は、先天的概念の対象連関の可能性が還元され得るのは悟性の統一形成的機能であることの証示である。

第三段階は、第一段階の結果によって要求されている制約を一方において充たし、他方において判断における悟性の統一機能の対応物と看做され得るところのものは如何なる概念であるかを示すことである (Vgl. S. 31)。

このような Horstmann の解釈は次のような見解に基づいている。「[空間及び時間の概念の] 先験的究明と [範疇の] 先験的演繹との間に、或る表象 (乃至概念) の認識遂行についての反省において或る共通性が見られ得るならば、同じような機能的対応が [空間及び時間の概念の] 形而上学的究明と [範疇の] 形而上学的演繹との間に存すると推量するのは尤もである」(S. 24)。

Horstmann の解釈に従うことができるであろうか。Horstmann は空間及び時間の概念の先験的究明と範疇の先験的演繹を対応させるのであるが、私は先ず之を問題としたい。空間・時間の概念の客観的妥当性に関しては Kant は少しも疑っていない。Kant はこの空間・時間の概念の先天性及び直観性をそれらの概念の形而上学的究明において明らかにし、この形而上学的究明に依拠してそれらの概念の先験的究明を遂行した。空間並びに時間の概念の先験的究明は、空間並びに時間が純粹直観であることによってのみ、それぞれ幾何学の先天的総合的判断並びに算術と一般運動論との先天的総合的判断が可能であることを示すものである。之に対して範疇に関しては Kant はその客観的妥当性から出発し得ないのである。Kant は範疇の客観的妥当性を基礎づけなければならないのである。範疇の先験的演繹は範疇の客観的妥当性の基礎づけをめざすものである。斯く解されるとしたら、空間・時間の概念の先験的究明と範疇の先験的演繹との間に、「或る表象 (乃至概念) の認識遂行についての反省において或る共通性が見られ得る」とは言い得ぬと思われる。Horstmann が空間・時間の概念の形而上学的究明と範疇の形而上学的演繹との間に「或る表象 (乃至概念) の認識遂行についての反省において或る共通性が見られ得る」という見解を採るのであれば、私はこの見解に従うことはできない。

結 論

Kant の範疇の形而上学的演繹と先験的演繹との関係は『純粹理性批判』の第 2 版において初めて明瞭なものとなった。範疇の形而上学的演繹は範疇の先験的演繹を前提するのである。『純粹理性批判』第 2 版の範疇の先験的演繹においては、統覚の必然的統一の原則は経験の可能性がそこから引き出される前提であったが、『プロレゴメナ』においては統覚の必然的統一の原則のことが言及されていない。このため『プロレゴメナ』においては判断について不十分な定義しかなされなかった。したがって『プロレゴメナ』においては範疇の定義は不十分なもので終わったのである。この場合、範疇の形而上学的演繹の、先験的分析論における位置は正しく捉えられることはなかった。之に対して『純粹理性批判』の第 2 版において範疇の形而上学的演繹の、先験的分析論における位置は初めて明瞭なものとなったのである。

範疇の形而上学的演繹については私はそれを判断表からの範疇の導出として捉えたが、Horstmann は私と

は異なる捉え方をしていた。私は Horstmann の範疇の形而上学的演繹についての理解には従い得ないと考える。

註

- (1) Kant がここで判断について扱ったとき、判断は一般概念（例えば「可分的なもの」の概念）の存在を前提するものとして捉えられている。というのは「あらゆる判断のうちには多に対して妥当する概念が含まれ、この多の下にはまた、対象に直接連関するところの与えられた表象が含まれている」と Kant が述べているからである。一般概念の形成は意識の分析的統一を前提する。意識の分析的統一が成立するためには表象比較がなされなければならない。一般概念の存在は表象比較がなされていることを示す。一般概念の形成と意識の分析的統一との関係については次の文が参照さるべきである。「意識の分析的統一はあらゆる一般概念そのものに属する。例えば私が赤一般を思惟する場合、（徴表として）どこかに見出し得る、或いは他の表象と結合されてあり得る性質を赤一般によって表象する。斯くして先行的に思惟された可能的総合的統一によってのみ私は分析的統一を表象し得る。様々な表象に共通のものとして思惟さるべき表象はその様々な表象に属するものとして看做されるが、その様々な表象は上述の表象の他に何らかの異なるものをそれ自体に有する。したがって上述の表象は他の（単に可能的であるにすぎないにせよ）表象との総合的統一において前以て思惟されなければならない。上述の表象を一般概念とするところの意識の分析的統一を上述の表象において思惟し得るに先立ってである」(B133-4 Anm.)。一般概念の形成は意識の分析的統一を前提するが、意識の分析的統一は意識の総合的統一を前提するのである。
- (2) Vgl. Prolegomena, §20 (Kant's gesammelte Schriften <Akademie-Ausgabe> Bd. IV, S. 300-2). Kant が「空気は弾力を有す」という判断と「直線は二点間の最短線なり」という判断とを挙げていることは示唆的である。以下 „Prolegomena“ からの引用は文中に項の番号のみを挙げて示すことにする。
- (3) Paton の解釈に従った。(cf. Herbert James Paton : Kant's Metaphysic of Experience, I, 4th impression, 1965, p. 286.)
- (4) Peter Frederick Strawson : The Bounds of Sense, First published in 1966, Reprinted 1982, pp. 73-4, 本書は熊谷直男、鈴木恒夫、横田栄一の三氏により邦訳され、『意味の限界』（勁草書房刊）として1987年に公にされている。私はこの邦訳を参照させていただき、その

訳文を引用させていただいた場合があることをここに付記する。

- (5) Strawson : op. cit, p. 87.
- (6) Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaften (Kant's gesammelte Schriften <Akademie-Ausgabe> Bd. IV, S. 475). 以下この書からの引用は巻数と頁数のみを挙げて示す。
- (7) 完全な演繹は「原則的分析論」でなされるものと Kant は考えたと解される。というのは次のように Kant は『純粹理性批判』において述べているからである。「第二の道しか残らない……。即ち範疇は悟性の側からあらゆる経験一般の可能性の根拠を含むというのである。しかし範疇が如何にして経験を可能ならしめるか、そして現象へのその適用において経験の可能性の如何なる原則をもたらすか、この点については判断力の先験的使用に関する次の章が更に多くのことを教示するであろう」(B167)。
- (8) 範疇についての斯かる定義は『自然科学の形而上学的原理』の序文の註にみられるが、『批判』の第1版及び『プロレゴメナ』においては見られないように思う。なお B143の第20項の命題IVの後の§13を Vaihinger の訂正に従って§10としたが、このことは命題IVの根拠が§10に示されているということを指すものではないだろう。範疇について§10において言及したことに Kant が注意を促しただけである。命題IVの範疇についての捉え方は『自然科学の形而上学的原理』以降のことに属するのであり、『批判』第1版の76-83ページ (B102-9, §10) には見られないのである。
- (9) Strawson : op. cit, p. 85.
- (10) Strawson : op. cit, p. 73.
- (11) Strawson : op. cit, p. 76.
- (12) Strawson : op. cit, p. 75.
- (13) Strawson : op. cit, pp. 87-8.
- (14) Logik (Kant's gesammelte Schriften <Akademie-Ausgabe> Bd. IX, S. 102), 以下 Logik からの引用は項の番号のみを挙げて示す。
- (15) Vgl. Hans Poser : Die Stufen der Modalität. Kants System der Modalbegriffe, in : Logik, Ethik und Sprache, hrsg. von Kurt Weinke, 1981, S. 197.
- (16) Vgl. Poser : op. cit, S. 208.
- (17) Rolf Peter Horstmann : Die metaphysische Deduktion in Kants „Kritik der reinen Vernunft“ in : Probleme der „Kritik der reinen Vernunft“, hrsg. von Burkhard Tuschling, 1984, S. 15ff.